(E)～僕のサクセスストーリー～

カブトムシの子供

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
（Ｅ）～僕のサクセスストーリー～

【Ｎコード】
Ｎ８０６６Ｅ

【作者名】
カブトムシの子供

【あらすじ】
高校一年生、伊藤夏《イトウナツ》趣味；食事。身長１７０センチ体重８５キロ。性別♂。青春求めていざダイエット

プロローグ（前書き）

誤字や誤用がありましたら、ご指摘ください。

プロローグ

僕の名前は、伊藤夏（イトウナツ）
この春から高校生になる男。
普通の新高校１年生だったら、少しの不安はあるかもしれないけど多いに期待しちゃうよね・・・・・カワイイ子いないかな！ってけど、そんな期待も僕にはまったく必要ないんだ。
だって、どうせ相手にされないってわかってるから。僕はもの凄いぽっちゃりだから・・

食べる事、寝ること、遊ぶこと。自分のしたい時にしたいだけしてたら、一年で２０キロも太っんだ。まさに自業自得☆
正直、容姿なんて気にしなくても生きてこれたし友達も彼女だっていた。

自分を磨こうなんて、微塵も思わなかった。欲望に従って生きるって凄い楽だから。
「このままいったら、相撲取りね」母さんに言われた未来は順調に現実になりそうだった。

あいつらに会うまでは。

太陽に照らされ、桜の花びらにも歓迎されたあいつ等は、すごく、すごく、輝いていたんだ。

1キロ

「いってきます！あ、僕のプリンとチョコレートは食べないでよ！今日は午前で学校終わるし、帰ってきてからのデザートなんだから。」

「はいはい、いってらしゃい。」

母さんはいつも僕の食べ物を奪う。だからしっかり釘をさしておかないといけないんだ。食べ物の恨みは末代までってね。

何はともあれ春休みも入学式も終わり今日から、僕、伊藤夏は高校生活をスタートさせる。

どんな高校生活が待っているのかな。まぁ、食べ物に困らなければ別にどうでもいいけど。

歩いて高校へ向かう。朝から汗かきたくなんかねーよ。この愚痴は３年間続くのかも。

高校は坂をのぼった高台にある。家から歩いて１５分、桜並木を抜けると坂の入り口。桜が風に舞って踊ってる。太陽も春らしく謙虚に道を照らしてる。口に出したら恥ずかしいような言葉も思い浮かぶってことは、この僕でも新しい生活に期待してるのかね。

フュッ

前を歩いてる女子のスカートがめくれた。

「あ、ピンク」

後ろから的確に迅速にアナウンスしたやつがいた。

髪は長髪、身長は・・・・・でかい！１８５はありそうだ。僕より頭一つ以上違う。顔は・・・カッコイイ部類に入るのかな。眼が大きくて鼻筋もしっかり整っていて、確実に女受けいいタイプ。こーゆうタイプが何股もして女の子を弄ぶんだろうな、許せん！

とりあえずガタイ良いから、離れるか。くわばらくわばら。

「あれ、お前同じクラスじゃね？一緒に教室いこうぜ」長髪長身スケコマシが僕に声かけたよ！おいおいいきなり友達ｇｅｔか？！僕もなかなか人に好かれるからなー・・・・ってアレ・・

「まだ朝飯食ってないから売店行くんで無理。てか初対面にお前はないでしょ。名乗れよ」

こんなカッコイイ返事が僕なわけもなく、見事に勘違い。長髪長身スケコマシが声かけたのは、僕の隣の寝癖がひどいこの少年。茶髪で髪はぼっさぼっさ、眼はしっかり開いてないけど大きいのがわかる位くっきり、鼻は高すぎもなく低すぎもない理想形。そしてなによりも、顔が物凄くちいさい。僕と身長は同じ位だろうけど、背が高く見えるよ！この人もモテるんだろうなぁ、とりあえずここから離れよう・・・・イケメンと比較されるのは嫌だしね・・勘違いしたのばれたらイジメの標的になるかもだし。早く教室いこ。

「俺の名前はだいすけ。伊藤大祐。俺も売店用事あったから行くわ」

「俺はふみや、伊藤文弥。伊藤ってメジャーな苗字だったんだね。とりあえず余鈴鳴る前に教室行けるように急ごうか。」

「案外フレンドリーだなお前。俺の高校友達第一号だわ」

「お前じゃなくて文弥。」

「わりーわりー、まずいくか！」

「うん」

・・・・・・・・なんでイケメンってコミュニケーション能力高いんだろうね。普通あんな男前な受け答えする?!僕がしたら確実に白い目で見られてトイレで弁当生活だよ・・・・・

グゥ〜ギュルルル

お腹減ったし、無駄な事考えるのやめよーっと。早く学校終わらないかな。

キーンコーンカーンコン

やばいいいい!余鈴なっちゃったよ!いそがないとっ!たしか僕のクラス［1－B］は四階の階段を登った正面だ。遅れて登場したら注目されちゃうからとにかく急がないと!

はぁはぁはぁはぁはぁ

こんなに走ったのなんていつ振りだろ?部活引退して以来だから半年くらいか・・・・体力落ち過ぎだ、けどまだ本鈴は鳴ってない!そして今は［1－C］まで階段五つ分。なんとかまにあっ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・てない?!なんで?!どうして?!みんなちっきり席についてるよ・・・・しかも女子がガン見してる?!ついに僕の、ぽっちゃりの時代がきたんだ。

「おい、教室入るなら早く入ろうぜ」

「てか邪魔」

大祐君、君は割といい人なのかもね。スケコマシって言ってごめんね。

文弥、帰っちゃえ。一生寝ぐせでいいように永遠の眠りにつくがい

い。

「す、すみませんっ」

よく言うよね？顔で笑って心で泣けって。アレ・・・・言わないかみんなはこの二人を見てたわけね。また淡い期待もっちゃって、恥ずかしい・・・

「文弥、黒板に席順かいてるぜ・・・・って席三つしか空いてないからすぐわかっちまうな！うぁー俺一番前だよ・・・ま、一番廊下に近いし早く帰る為には良しとするか。文弥は俺の列の三番目だな」

「席なんてどこでもいいし」

「おーい、さっきの人！先生来る前に席座っちゃえよ！俺の後ろでしょ？」

「は、はい。あ、ありがとうございます」

「ださっ。タメなのに敬語とか」

「文弥、イチャモンつけるなよー。それにあんた！敬語とかマジやめようぜ、クラスメイトだろ？」

「う、う、うん。」

「名前なんつーの？俺は伊藤大祐、で、さっきの感じ悪いやつが伊藤文弥。」

「なに偉そうに俺の自己紹介までしてんの」

「わりわり、で、名前は？」

「い、伊藤夏です・・」

「なつ、か！伊藤3人同士仲良くしような！」

「俺まで混ぜるな、大祐。」

「カリカリすんなよー。カルシウム足りてるか？」

「牛乳は大好き。ヨーグルトは嫌い」ズブッ、チュー

「うまいこの牛乳」

「よかったな・・・なんかお前わかんねーやつだな」

な、なんなんだこの二人？！険悪なムードかと思ったら、和んでるし。とりあえず女子、男子両方からの『お前はいらね』視線が痛いよおおおおおおおおおおおおおお

「夏、さっきはごめんイライラしてた。とりあえず伊藤同士仲良くしよ。はい、これ。うまいよ無調整だから」

あ、あ、あのなんか惚れそうなんですが、男に。イケメンは顔だけじゃないのかっぁぁぁぁ

「夏、文弥ってよくわかんないやつだろ？とりあえずのんどけ！勢

いで！」

「さっき会ったばかりのやつに語られたくない。」

「お前怒るか和むかどっちかにしろ！夏が困ってるだろ；」

いや困ってるの合ってるけど理由が違うよ大祐くん。女子の視線が消えろ豚って感じなんだよ。デブに人権はないの！？

「飲んでみなよ夏。うまいよ。謝罪の意味もあるし」

「は、はい、いただきます。」

クピッ　チュー

「これでチャラ」

「だな」

「は、はい！」

ガラガラガラー

「はい、みんな席につけー」

先生の登場。今の状況を考えると、先生の事なんてどうでもいいや・・・・・・・・・・・・だって、この二人に目をつけられたせいで、他のクラスメイトを敵に回してしまったんだから・・・・・・・

静かで代り映えのない高校生活は、僕にはないようです。

プリン・・・

―２キロ

「あーやっと終わった～！ホント、だりーのな。高校生活を送るにあたっての目標を考えろとか。ふつーに入学二日目でそう簡単に悟れないつーの！」

と、大祐君は言ってますが。はい、そうです。年度初め恒例のクラスの顔合わせ的な催しが今終わったところなのです。とにかく、今、大祐君の発言に反応するわけにはいきません。僕の当面の至上命題は速効で階段を降り、玄関で靴を履きかえ、さっそうと校舎から離れること。

ふー、なんとか校舎から安全にでれたー。

なぜ、僕が身の心配をして学び舎からｍｙ　ｈｏｍｅ　に帰ることになったかというと・・・・・・・僕こと伊藤夏は初っ端からクラスの大多数かいわれもないやかっみを・・・・・・・・・受けることになってしまったのです！！！大きい人と牛乳大好きの人のせいで・・・

だけど、家に帰ればそんな心配からも解放される！だから今は無事に家にたどりつかなきゃ！

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

「と、とりあえずさ・・・なんで二人はついてきてるのか、な？」

ここはｍｙ　ｈｏｍｅ　。両親は共働き、一人っ子。母は車がないことから察するに休暇を能動的にエンジョイしてるみたいだね。子供ながらにうれしいよ、ライフワークバランス！使い方ちがうか～っははははは・・・・・・っておい！慌て過ぎて現状分析しっちゃたよ。どうして、あの二人が僕の後ろで物ほしそうにこっちを見てるのかな！無視したいな！けどもう声かけちゃったしな・・・

「なつ～、俺等なんかクラスで浮いてるっぽいんだよ・・・だから作戦会議しようと思ってついてきたわけだ。」

？う　い　て　る？いやそりゃいい意味で浮いてますよ君たちは。てか誰だよ、この二人にそんなこと言える人間。神をも怖れない行為じゃないですか！とりあえず聞いてみよう・・・

「だ、誰がそんなこといってたの？別に浮いてないとお　おもうよ？」

「文弥が」勢いよく大祐君は文弥を僕に突き出した。僕に当たった。１０のダメージ。

「痛いよ夏、詫びに牛乳買ってこい」

「す、すいません！」・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・って、ボクハワルクナイヨ

「文弥が呟いたんだよ、伊藤組はういてる、って。だから、お前も含めて作戦会議ってわけ。」

うーん、たくさんつっこみたいけどメンドーだから一つだけ。文弥、

身長欲しいんでしょ？

「そ、そっかあ・・たしかにー浮いてるかもね？ほ、ほら、二人ともかっこいいし！だから浮いてるのは、二人だけだとおもうよっ！僕はデブだし関係ないって」

「いやそれがな、文弥の呟ききいた後に玄関で靴履き替えてたら伊藤ってうざくない？なんか暑苦しいよね、見た目　ってクラスの女子が言ってたんだよ。伊藤って俺ら三人だけだし、どの伊藤か特定するしないにかかわらず三人で助け会えばいいって俺は思ったわけ。」

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

僕は女の子なんてきらい・・・・・じゃなかったのにぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃ

暑苦しいってなにさ。デブでも誰もが冬場コートがいらないとかいう特殊能力あるわけじゃないんだ！僕は寒がりだ！・・・それよりどうしよ、二日目にしてイジメ確率急上昇だよ・・

「夏、牛乳。」

文弥君、気持ち察して・・・・・・・

ー3キロ

「ただいまより、第一回伊藤組がクラスの中で浮かないようにするための作戦会議を開始します。各人しっかり対策を考え発言するように！」

我が家の客間、イケメン二人とデブ一匹。プリンにはコーラに決まってるのにどうして牛乳なんだよ！！！！！しかも最近牛乳高いし！インフレ反対！あ、どうもカレーはふりかけ扱いの夏です。いきなり押し掛けてきた大祐と文弥、御両名と第一回伊藤組～略～　なるものをひらいています。はっきり言って、帰ってほしいです・・だってプリンが減ったんだもん・・はぁ。
冗談さておき、僕はクラスの女子に悪いイメージをもたせてしまったようです・・・学校いきたくないなー・・・・・

「おい！夏！顔がカビ生えそうなくらいどんよりしてるぞ！」

「そりゃそうだよ・・・いくら僕でも嫌われるのはすきじゃないし」

「まだお前ってきまったわけじゃないだろ！俺か文弥かもしれないし。」

「そうそう。夏がいくらデブだからって、暑苦しいってダイレクトに形容するほど知的レベル低くないでしょ。うち進学校だし。」

「・・・・・文弥・お前、本人の前で本当のこというなよ！かわいそうだろうが！」

・・・・・・・・・お二人共、タバスコを目にさしてみな？僕の気持ちがわかるから・・・

「なにはともあれ、対策立てよ。とりあえずお互い自己紹介ってことで。夏からどーぞ」

悲しみを心にしまう時間もくれないのね。鬼っ

「僕は東中卒の伊藤夏。」

「自己紹介なんだからもっといろいろ言って」

「は、はい、部活はバスケやってました・・・あとはっ生徒会の会計担当してました・・・あとは・・・プリンとかチョコレートが好きです・・・こんなもんでいいですか？」

「身長体重好きなタイプ彼女の有無も」

「は・・はい。１７０センチ８５キロ、好きなタイプきっぱりした性格でショートカットでかわいい子です！彼女はいません！」

「ふむふむ。夏は肥満なのに理想は高い・・と。つぎは俺だな！俺は伊藤大祐。南中卒。野球部やってた。食べ物は基本なんでも好きだな！身長１８３センチ体重６８キロ。好きなタイプは夏と同じできっぱりした性格の子。彼女はいない。と、まぁこんな感じだ。最後は文弥だな。」

「伊藤文弥。身長１６９センチ体重５５キロ、けど伸びるから。北中卒。部活は卓球。彼女いない。好きなタイプはうるさくない人。」

「よし、お互い最低限のことは知ったな！今日は伊藤組の門出だな！」

「わかった。」

びっくりした～文弥くんいきなり大きな声だすなよ！ちびっちゃうよ！

「な、何がですか？」

「暑苦しいのは、大祐だ。」

「？！なんでだよ！！」

「ノリが熱い」

たしかにね。けど見た目っていってたんだから大祐くんじゃないよ。思いつくままに発言するのやめようね。

「ノリはあつくてもいいじゃねーか！ハイテンションで生きようぜ！」

「夏、どうすれば浮かない様になれると思う？」

文弥は大祐の扱いがうまいな～。華麗にいなしたよ。というか、僕、つまり元凶に問題提起するとは中々腹黒いな。ふん！答えなんてわかってるさ

「た、たぶん浮いてるのは三人組みのなかに一人場違いがいるからなんです。だから僕を省いてくれればすべて丸く収まります。だから帰ってください。」

いってやったぜ。これで少しは注目の的から外れて平和な生活に・・

・・・・・・

「な、なつ・・・・お前はなんて友達想いのいいやつなんだ！！！自分を顧みず俺たちのために別れを選ぶなんて・・・・決めた！俺はお前と親友になる！」

「そうだね。夏いいやつだね。親友だよ。牛乳おごるよ。」

あれ、この人たち日本語通じないんだね。みんな！日系外国人って意外と日本語うまいけど肝心な解釈能力が皆無だから気をつけて！

「え、そういってもらえるの嬉しいんだけど・・・迷惑かけたくないし・・・ね？だからいいよ！解散解散！」

「夏、外見のことで友達を選んだりしないよ」

「そうだぜ」

・・・・・勘違い猛々しいよぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉ

「夏、俺に任せて。外見が変われば暑苦しいなんていわれなくなるから。」

「そうだ、俺らに任せろ！」

『明日からダイエットだ！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！』

・・・・・・・・声揃えないで勘違いさん・・・・

−４キロ

「腹筋３０！」

・・・・・・・えーっと・・なぜか腹筋を汗だくでやってる夏です。どうにも今の状況は自分自身把握しがたいのですが、あ　の　二人は僕の親友になったとおもってるようで・・・・・・僕にダイエットと称した肉体労働、いや肉体浪費を課してるのです！！！！もう散々です！！！！！！！！！この腹筋だってもう１０セット目なんです！３０×１０で３００です・・・へそを見るのさえプルプル状態です。

二人は何をしているのかというと。

涼しい顔して牛乳飲みながら、ぼ　く　の　チョコレートを食べています。

うん。来世は二人とも雑巾だね。床にこぼれた牛乳を吸い込むがいいさ、そして臭いと罵られるがいいさ　　ククク

「次はスクワットなー。さっきの腹筋さぼり入ってたろ！まじめにやれよー。意識を使ってる筋肉に集中させるるかさせないかで脂肪の燃焼度が全然違うからなー」

やけに詳しいね大祐くん。さすがにスポーツマン。けどね、雑巾に人権はないんだよ。来世まで束の間の安息を噛みしめておきなよ。

「もう疲れたよ・・体が動かないよ・・」

「そんなじゃ痩せないよ、夏。」

だからこっちは頼んでないっての！・・・・・もう限界。倒れたふりして休もう・・・

バタッ

「げ、限界です・・もう休ませてください・・。」

これで二人ともあきらめ・・・・・・・？？？？

二人の顔ってこんなに赤かったっけ？？あれ？なんか皺がうかんでる。様子がおかしいってまさにこの状態だよね！ま、いいやこのまま狸寝入りでも・・・・・・

『ナツ　ウソ　ダメ　ユルサン』

インディアン出現んんんんんんん！！！！！！！！！！

〜３時間経過〜

ヒー・・ゼヒ・・ヒー・・フー・・・ホー・・ゼー・・・

「夏よくがんばったな！」

「そうだ。よくやった。はい、牛乳。あ、牛乳は太るからダメ。とりあえず体重測ってみようか。」

目の間に出された体重計・・・これくらいやったんだし５キロは堅いだろー・・さ、乗ってみるか・・・ヒョイッ・・・・・・？！おかしいな。もう一回！ヒョイッ・・・・・・この体重計壊れてるよ！

「二人とも、この体重計壊れてると思います。」

「なに？！俺が乗ってみるか！・・・・・こわれてないぞ？夏。」

な、なんですと？！・・・・・・あ　あんなに動いたのに。

「夏、ダイエットは甘くない。」

NOOOOOOOOOOOOOOOOOOOOOOOOOOOOO！

；現在の体重　８４キロ

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8066e/

（E)～僕のサクセスストーリー～

2010年10月14日16時34分発行